

英語英米文学

◇教員◇

教授：大橋洋一、後藤和彦、渡辺明、阿部公彦

准教授：諏訪部浩一

客員教授：Stephen Clark

助教：中嶋英樹、木村明日香

◇学生◇

学部：57名、修士課程：13名、博士課程：22名

英語英米文学専修課程は、英語学、英文学、米文学の3分野からなっており、学生諸君は、必修科目としてこの3分野の各概説・概論を履修することをのぞけば、だいたいのところ好みの分野の勉強に集中できる。その場合、何々先生のゼミに所属、といった小枠は存在しないから、諸君は自由に自分の方向をさだめることができる。そうして行きつ戻りつ、しだいに思いさだめたトピックや作品について卒業論文を書くことを、英文科ライフのいわばクライマックスとしてほしい。卒業論文は英文で30ページ(7,500語以上)。勉強になって思い出になるだけでなく、英作文からパソコン操作までもうまくなってしまうという一石四鳥の事業である。その間、専門の近いスタッフや助教が、書き方や参考書目などについて積極的に相談に応じてくれる。

英語学は、ある時期の言語の特徴（古英語・中英語・初期近代英語・現代英語）を研究する共時的研究と、通時的な言語変化の諸相を研究する歴史的研究の2つに大別される。共時的研究でも歴史的研究でも、音声・音韻、語彙・形態、統語、意味・語用の各側面について考察を行うが、その基盤として、言語の一般的性質・仕組みについて正確な理解をもつ必要がある。一般言語理論と個別言語の実証的研究は相互依存関係にあり、両者あいまってはじめて、実質的な研究成果が得られるので、授業では、英語の詳細な事実の検討とその理論上の意味合いを総合的に把握する訓練に重点をおく。

英米文学は、範囲が定めがたいほどひろい。その中心となる英米の文学がスタッフによってだいたいカバーされており、授業は以下にもうかが

われるように、従来から精読を旨としている。だがその後、たとえば英米以外の英語圏の文学を、卒業論文などで学生諸君が自主的に研究することは支援されるし、児童文学、大衆文学などのいわゆるサブ・ジャンル、美術や音楽と文学との諸関係などについても、興味をひろげてもらってかまわない。後二者については、例年卒論で取り上げる諸君があらわれるし、少しずつ授業で扱っている。また、言うまでもなく、具体的な作品の読解を重視する点で英米の地域研究とは異なるけれども、社会的、文化的アプローチは当然歓迎される。英米のものを主眼とした、文学理論・批評理論そのものの研究もちろん可能だ。要するにほとんど何をやってもよいのであり、スタッフはそれぞれの関心に応じて主だった作家・作品を扱うが、それをきっかけに自由な途をひらく、進取の気性こそここでは多とされる。

さて、個々の教員から授業・研究の内容をかいつまんで自己紹介しよう。

大橋教授：シェイクスピアを中心とするエリザベス朝・ジェイムズ朝演劇を主要な研究対象にしている。英米の批評理論にも関心を寄せている。シェイクスピアと批評理論というのは、一見、意外な取り合わせかもしれないが、すでに英米では、新しい批評理論によって、英米文学の読みなおしが、文学史そのものをも再考するかたちで行われ、シェイクスピア研究もその例に漏れない。そのため、どの分野の研究者も、批評理論との遭遇は避けられないのが現状だが、実際に理論を作品に適用して、テキストの意味を豊かに広げるにはまだ克服すべき問題もある。そのため理論を活かす道を一方で理論の再検討を行いつつ、他方ではシェイクスピアをはじめとする個々の具体的な作品の精読と検討によって模索できればと考えているが、講義では、批評理論への導入に専念し、個々の具体的な作品と向き合うときの意識と道具を手渡すことを心掛ける。また演習では、個々のテキストの語を重視しつつ、そこからテキストをとりまく社会的・文化的コンテクストが透けてみえるような—つまり90年代に入ってから急速な高まりをみせる批評意識を活かすような—読解の方法を探るとともに、それを実践してみたい。

後藤教授：アメリカ文学、特にアメリカ南部の小説を主たる研究対象としている。南部は、自由と平等の国アメリカにあって、戦争まで起こして

奴隷制度を守ろうとした土地柄。その土地に、戦争の敗北からほぼ半世紀を経た 20 世紀前半、突如独特の文学が花開き、すぐれた作家が陸続と登場、この現象は「南部文芸復興(ルネッサンス)」とも称されるが、それはただの偶然だったのか。「偶然」といえば、無論それまでのこと。だが、もしもそれが偶然ではなかったなら、つまり「南部文芸復興」の百花繚乱が長い雌伏のときを経て訪れた南北戦争後の「戦後文学」の暴発なのだとすれば——この「もしも」が私の研究の起点にあり、私の研究をいまだに駆動している——ならば、一般に、戦争と、いや戦争の敗北と文学との関係はいかなるものか、と自然に問いがつながっていったのは、やはり私が敗戦国日本に生まれたからだろうか。こうして戦後文学としての南部文学の秘密を探るべく、これとはあまりに違って見える祖国の戦後文学を横目で見ているうち、昨今ではむしろ南部文学の側を横目で見ているような気もしており、授業中にそのあたりを口走る可能性は高いが、アメリカ小説をできるだけ正しく深く読む努力をするというのがすべての建前であることは言うまでもない。

渡辺教授：統語理論が専門。高度な理論的判断がどのような形でデータの分析に反映されるかということに特に興味がある。最近では移動現象に焦点を当てて理論開発の研究をすすめている。授業では、さまざまなレベルにおいて、理論の基礎をおさえていくようにしたい。理論的研究というものは、(素人がよく誤解するように)一時のはやりすたりではなく、長年の積み重ねの中から生まれてくる重要な問題をいかに解決するかがその本質である。そのような研究伝統を身につけ、理解に努めるのが授業の主目標となる。そこから、どのようにして新しいものを創り出していくかは、それぞれの努力と工夫次第ということになる。

阿部教授：現代英米詩を主要研究対象とする。英語詩における〈伝統〉の持つ呪縛力に敬意を払い古典的な作品をも考察対象とするが、出発点はあくまで現代であり、それ故「今、この現代世界において、わざわざ詩が書かれることに意味があるのか?」、「このような環境で我々が詩を読むとはいったいどういうことか?」、「どうして詩について語る必要があるのか?」といった学生諸君が当然持つ(べき)であろう疑問と関わり合うような授業展開が理想である。また刺激的な作品世界を体験してしまったと

きの、「ああ、何かこれについて語りたい。何とかしたい」という、ムズムズするような衝動にはけ口を与えうる批評の可能性を探るのも大きな目標のひとつである。

諏訪部准教授：アメリカの20世紀小説を主な研究対象としてきたが、そもそも小説とはいったい何なのかという大問題に関心があり、したがって19世紀小説を無視しているわけではない。この「大問題」を、個々の文学作品をどうすれば面白く読めるかという実践において考えるのが、当面の方針ということになる。教員の「文学」へのそのような関心は、授業にも当然反映されることにはなるが、それぞれの作品を、それぞれに相応しいスタンスを模索しつつ読んでいく以上、アプローチは限定的というより包括的となるはずであり、そのようにいわば柔軟性を強制する形で受講生自身の問題意識を拡大深化させることを目標としたいと思っている。

クラーク教授：My original topic of research was on William Blake and Romantic poetry, which has gradually expanded to include English literature from the 16th century and Shakespeare through to contemporary novels, poetry and film. Other more recent interests include post-colonialism, gender studies, new historicism, narratology, and Anglo-American and European critical theory, and also more specifically on the reception history of Blake and other Western authors in Japan. In my classes this year, I will use texts from a wide variety of genres and periods to discuss narrative technique and postcolonial traditions in poetry. The teaching will be conducted in English, combining lecturing with exercises in close reading, presentations by students and some general class discussion. I hope this will help enable students to both consolidate and extend their existing linguistic and analytic skills, and provide helpful preparation if they intend to study abroad in future.

上記の6名の専任教員が担当する専門科目（概論・概説や演習・特殊講義）に加えて、教養学部や学外から招いた非常勤講師の先生方による専門科目（英語学特殊講義・英米文学特殊講義）や学部後期課程の共通選択科

目としての英語科目（「英語後期(Speaking, Writing, Reading)」や「アカデミック・ライティング(Introductory, Intermediate)」）も開設されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会も常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムも開かれている。

例年6月には、大学院生のTAと外国人教員の協力により、学部3年生を主に対象とした“英語漬け”の1日を体験する「イングリッシュ・キャンプ」も開催される。

本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職をめざして大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

以下、参考までに最近の卒業論文の題目を分野ごとに一覧しておく。(順不同)

<英語学>

Adnominal Intensifiers in Japanese and English

Unaccusative Verbs with an Agent / Cause

Controller Choice based on MDP and Ditransitive Constructions

<英文学>

The Sense of Ending in *Bleak House*

A Young Lady's Growth in *Emma*: From False towards True Englishness

The Transformation of the Characters in Mary Shelly's *Frankenstein*: Things Missing from *Paradise Lost*

The Dialogues in the Criticisms of Oscar Wilde: Their Style and Function

The Present Tense Narration in J. M. Coetzee's *Waiting for the Barbarians*

‘Not “Here, Here, Here” but Everywhere’: *Mrs Dalloway* and Transcendence

Chinese Commodities and British Characters: Tea, Opium and Silk in Charles Dickens's *Our Mutual Friend* (1864-65)

<米文学>

Dick Diver's Defeat and Self-Consciousness in *Tender Is the Night*
A Study of Grotesque and the Female Identity in Anderson's *Winesburg, Ohio*
The Death and the Woman in Hemingway's *Nick Adams Stories*
The Father-Son Conflict in *The Great Gatsby*
Joe Christmas's Southern Tragedy in *Light in August*
Is It O.K. to Be a Schlemihl? A Study of Benny Profane in *V.*
Self-Discovery and Loneliness in Toni Morrison's *Sula*: Sula as Nel's
Comrade and Double
“This is My Letter to the World”: The Letter Poems of Emily Dickinson
The Comic Structure of Eudora Welty's *Delta Wedding*
Innocent to Be Acquired: A Study of Truman Capote's *Other Voices, Other
Rooms*